あふひ

六

數者は岩とさわ

九曜文庫

[illegible]蔵書

（朱雀院の位ゆづり給　源氏廿二才のとき）

世中かはりて後（のち）よろづ物うくおぼされ御身の（源大将に任ぜらる）やむごとなさもそふにやかろがろしき御しのびありきもつゝましうてこゝもかしこもおぼつかなさのなげきをかさね給むくひにや（なを）我につれ（葵つか）なき人の御心をつきせずのみおぼしなげく今（いま）はましてひま（桐つぼの御門院よりせ給ひ葵つかたねまきひ給ふ）なうたゞ人のやうにてそひおはしますを今后（いまぎさき弘徽殿を皇太后と申奉る也）はこゝろやましうおぼすにやうちにのみさぶらひ給へば立ならぶ人なう心やすげなりおり（院）ふしにしたがひては御あそびなどをこのましう世のひゞくばかりせさせ給つゝ今の御（え）有様（ありさま）しもめでたしたゞ春宮（とうぐう　冷泉院の御こと）をぞいと恋（こひ）しう思ひきこえ

給。御うしろみのなきをうしろめたう思ひきこえて。（ざいしやう源を大将とかきそへし）大将の君によろづきこえしつけ給（源）もかくいてさもうしうれしとおぼしぬ。まことやかの六条の御息所の御はらの前坊の姫宮斎宮にゐ給ひにしかば。大将の御こころばへもいとたのもしげなきさばうくおさなき御ありさまのうしろめたさにことつけてくだりやしなましとかねてよりおぼしける院にもかゝることなんときこしめして故宮のいとやんごとなくおぼしときめかし給ひしものをかろがろしうおしなべたるさまにもてなすなるがいとおしさ斎宮をもこの御子たちのつらになん思へば。

いづかたにつけてもおろかならざらんこそよからめ。心のすさびにまかせてかくすきわざするはいと世のもどきおひぬべきことなりなど御けしきあしければ（源）わが御心ちにもげにとおもひしらるればかしこまりてさぶらひ給ふ。人（院付）のためはぢがましきことなくいづれをもなだらかにもてなして女のうらみなおひそとのたまはするにも（源）けしからぬ心のおほけなさをきこしめしつけたらん時とおそろしければかしこまりてまかで給ひぬ。又かく院にもきこしめしのたまはする人の御名もわがためもすきがましういとほしさにいとゞやむごとなく心ぐるしき

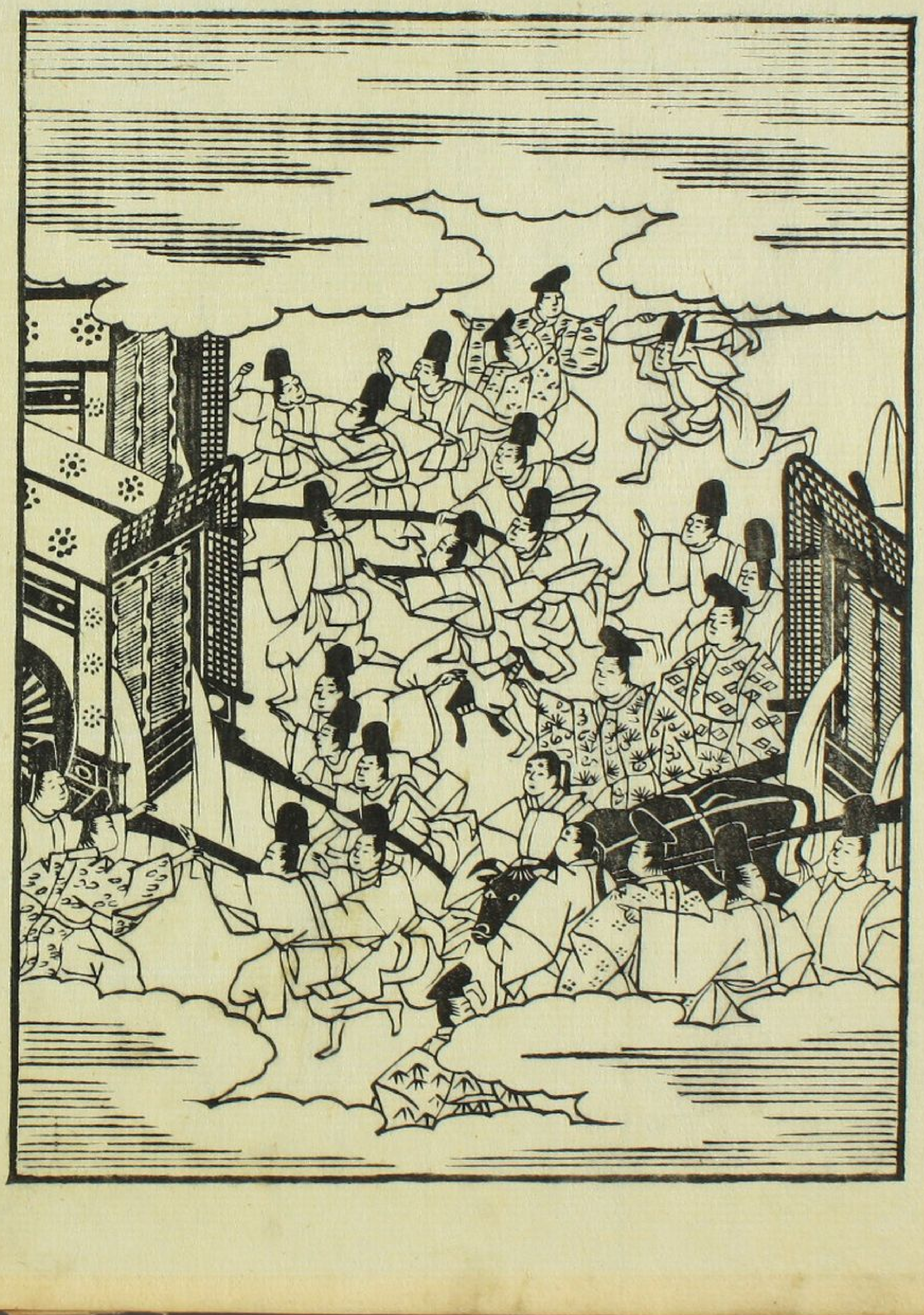
すぢにはおもひきこえ給へど・まだあらはれてハわざと
もてなし聞（きこ）えず・女も（此息所廿九源氏廿一）にげなき年（とし）の程（ほど）を
はづかしうおぼして心とけ給はぬ氣色（けしき）なればそれに
つゝみたるさまにもてなして院（ゐん）にきこしめし
いれ世中の人もしらぬなくなりにたるをふかう
しもあらぬ御心のほどをいみじうおぼし
なげきけり・かゝることをきゝ給ふにもあさがほの
姫君（ひめぎみ）はいかで人にゝじとふかうおぼせばはかなき
さまなりし御かへりなどもをさ〱なし・さりとて
人にくゝはしたなくはもてなし給はぬ御氣色を・
君（源）も猶（なを）ことなりとおぼしわたる大殿（おとゞ）（葵上父）にはかくの
さだめなき御心をこゝろづきなしとおぼせど・あま
りつゝまぬ御氣色のいふかひなければにやあらん・ふ
かうもゑんじきこえ給はず・心（葵上くハいにんと）ぐるしきさまの
御心ちになやみて・物心ぼそげにおぼいたり・
めづらしう哀（あはれ）とおもひきこえ給てうれしきものから
たれも〱ゆゝしうおぼして・さま〴〵の御つゝし
みをさせ奉り給ふ・かやうなるほどは・いとゞ御心の
いとまなくておぼしをこたるとはなけれどとだえ
おほかるべし・そのころ斎院（さいゐん）もおりゐ給ひてきさい
ばら（弘徽殿腹）の女三宮ゐ給ひぬ・帝（朱雀院）きさきいとことにおもひ
きこえ給へる宮なればすぢことになり給ふを

いとくるしうおぼしけれど。こと宮たちのさる
べきおはせず。ぎしきなど。つねのかんわざなれど。
いかめしうのゝしる。まつりの程かぎりあるおほやけ
ごとにそふことおほく。見所こよなし。人がらと見えし
ごけいの日かんだちめなど。かずさだまりてつ
かうまつり給ふわざなれど。おぼえことにかたちある
かぎり。したがさねの色。うへの袴のもん。馬（むま）くら
までみなとゝのへたり。とりわきたる宣旨（せんじ）にて大将
の君もつかうまつり給ふ。かねてより物見車（ぐるま）心づか
ひしけり。一条（でう）のおほぢ所なくむくつけきまで
さはぎたり。所〲（ところ〲）のさじきこゝろ〲にしつくしたる

しつらひ。人の袖ぐちさへ。いみじき見ものなり。大
殿には。かやうの御ありきもをさ〱し給はぬに。
御心ちさへなやましければ。おぼしかけざりけ
るを。わかき人〲。いでや。おのがどちひきしのびて
見侍らんこそ。はえなかるべけれ。おほよそ人だに
けふの物見には。大将殿をこそは。あやしき山がつ
さへ見たてまつらんとすなれ。とほき国〲（くに）よりめこ
をひきぐしつゝまうでくなるを。御らんぜぬは。いと
あまりにも侍（えづ）れといふを。大宮きこしめして。御心ち
もよろしきひまなり。さぶらふ人〲も。さう〲しげ
なめりとて。にはかにめぐらし（車え）おほせ給ひて

こゝ結。日かけゆきて。さしこまもわざとおすゝめさほまで
いでまへり。ひもゝみすり。うちわくりくるゝ。よりそて
そしうひさつざさてうちゝづふぶのさ眠車（ねぶりぐるま）。
おほくそさうりくの人るさひまはおもひさぐめて。
これさしのけさすゐ中よ。（御息所の車し）ばじろのすゞしゐれしゐ
あらざれのさほるゞしよしばめるよ。いうらひさ
いりてぶのらみすゐ袖ぐち。ものとそうざさるぞ。様の
多いとこきてのしりそてごとくさしるまやつれさるけりひ
あるくこゆる車かくり河おりざられはさしるまさやう
まさしのけなどすべされ車ゐまもおしずとぐらごそし
ろそてぶかれさむばいげ（地）ろゝまゝわつさ様どもゑひ
すぎちさはござるほどのゝいえあらためおへ
ぞかゝれくあさごぎんの人べいゝくたすどいへ
どえとゞめおへぞ。斎宮（さいくう）の御そく御息所（みやすどころ）様おぼし
こゞりてみすゞさめりまもやとしのびて出あへるなり
なりけるしつくれどもれげりう見んあうりぬざはう（葵ノ人行）
あよすていさかいさせそてあね様をぞうりけりうして
あひきしゆらんみすゞいゝ様（御息所に）ぞみれるゝの人ぞまゝ
じれてばいとおしところがうしようりいきんもわづゝ
さしられば。あつしずほどけろう。（葵ノ）ゐまゝれ車ぜゝそて
つげつれば。（御息所車）ひらゞまひのおくまゝしやられて。様
もみしず

（御息所）こゝろやましきをばさる物にてかゝるやつれを
それとしられぬるがいみじうねたき事かぎり
なし。しぢなどもみなおしをられてすゞろなる車
のどうにうちかけたれば又なう人わろくくやしう
なにゝきつらんと思ふにかひなし。ものも見でかへ
らんとし給へどとをりいでんひまもなきに事
なりぬといへばさすがにつらき人（源氏）の御まへわたり
のまたるゝも心よわしや笹のくまにだにあら
ねばにや（源）つれなくすぎ給ふにつけても中〳〵（御息所）こゝろ
づくしなりげにつねよりもこのみとゝのへたる
車どものわれも〳〵とのりこぼれたるしたすだ

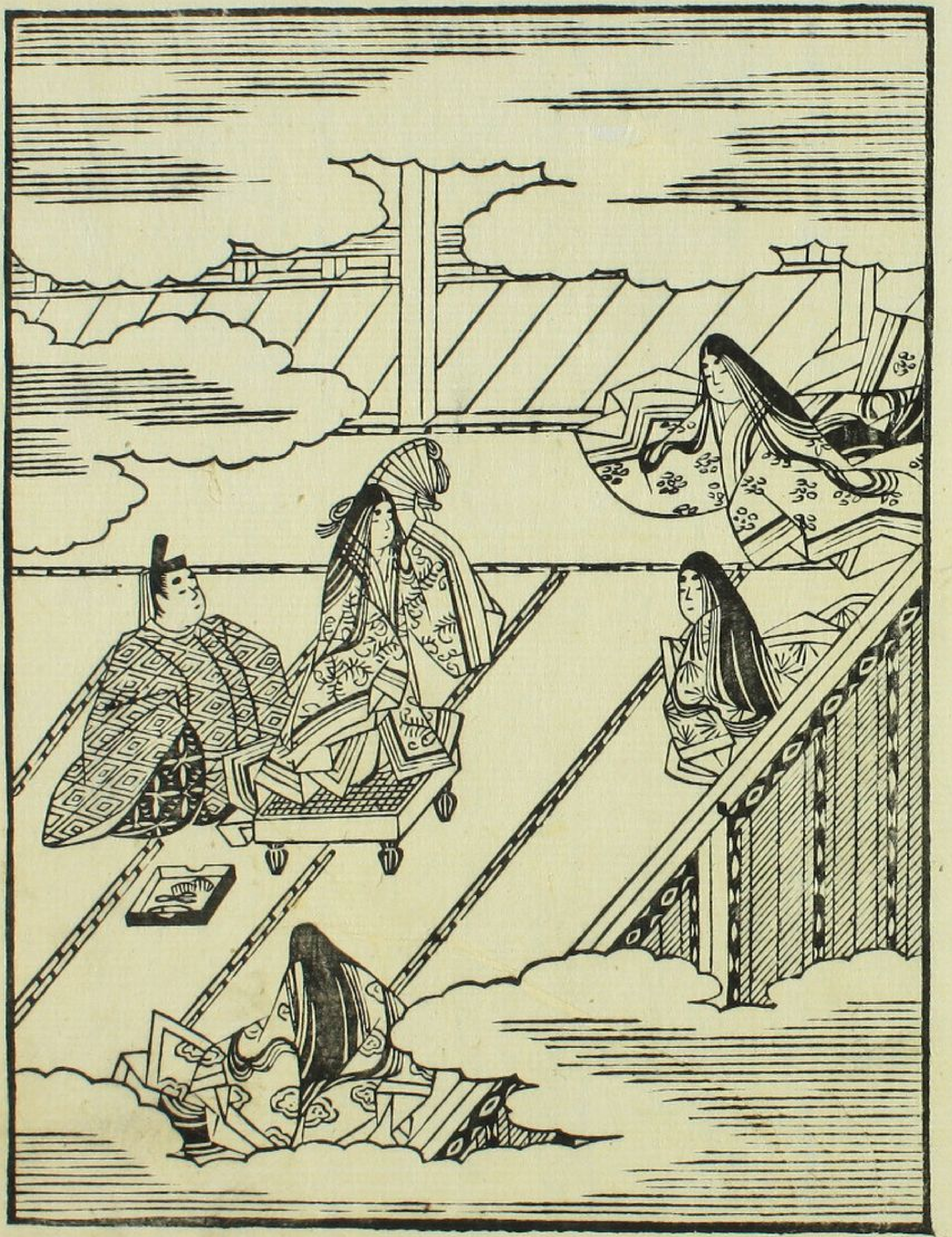


れのむさき陰どもくさしぬがかなれど法くゐきて
しりめなるめ給もなりたる後（葉之）のはしるなれはもの免ん
ぶちそやかり給ふれどものへなくうしこまりし心
だへなりけるやかる後（御息所）もしけられるなりき陰
うらみなりおぼさる
けさ（真葛）のことえてうしかのつれなきさる子の
すさ精ぞいとどしつかくと洞（ほら）のこがつくなど人の
ころもふくるなるれどもおやなるはさ陰かくうち
のはしじうのぞでぞへとなんざうしまうしかでとおぼ
さうかど（地）くまつけてさうぞく人のありさ陰いとき
おうしとくの人へうりとこゆるなるも上達部（かんだちめ）そいと

こともるはびそここるのれひろうまほそしけられ
よあうたねのかりのずいぞんよ殿上（てんじやう）のきうそなどの。
すうとふいつれのくまもあずめづしさ行幸（ぎやうがう）
あそのありのわざなするをとかふ右兵（うえ）の舞人（まひびと）のぞう
つうまりれりざしめ法（こ）ぞいぞんどもくうち寸
ぐるまぞゆくそのへて世るよそうしばられ
あへるさ陰来草（きき）もたびかぬはあまづけうまうぶ
さうぞくなまづいふもぐるすて女房のやしうぬ
や又おまなどの世をそむきさけうなどもこされま
ろびける抱見よ出るもれいもなみぢたまりやなお
まくとこゆるなかぬことあうまぶちうかれまけ見

てかみきこめたるあやしの物どものてをつくりて
ひたひにあてつゝ見たてまつりあぐるもおこ
がましげなるしづのおまでおのがかほのなるらむ
さまをばしらでゑみさかえたりなにともみいれ給
ふまじきえせずりやうのむすめなどさへ心のかぎり
つくしたる車どもにのりさまことさらびこゝろ
げさうしたるなんおかしきやう〳〵の見物なり
けるましてこゝかしこのしのびてかよひ
給所（ところ〳〵）は人しれずかずならぬなげきまさるかも
おほかりけり式部卿宮（しきぶきやうの宮）（槿君ノ父）さじきにてぞ見給ひけるが
まばゆきまでねびゆく人のかたちかな神（かみ）などは
めもこそとめ給へとゆゝしくおぼしけり姫君（ひめぎみ）（槿）は
年（とし）ごろきこえてわたり給御心ばへの世の人ににぬを
なのめならんにてだにありましてかうしもいかで
と御心とまりけりいとゞちかくてみえんまではおぼ
しよらずわかき人々はきゝにくきまでめで
聞（きこ）えあへりまつりの日（賀茂祭ハ四月中酉ノ日）は大殿には物見給はず大将
の君（源氏）かの御車の所（ところ）あらそひをまねび聞（きこ）ゆる人あり（あり）け
ればいとゞおしうしとおぼして猶（なほ）あたら
おもりかにおはする人（葵）のものになさけおくれ
すく〳〵しき所つき給へるあまりにみ（葵ノうへ）づからは
さしもおぼさゞりけめどもかゝるなからひはなさけ

けはまべき地ともおぼいたらぬを心をきてゝま
そゝぐひてつきぐしからぬひとのをきをせらるゝか
らうし御息所(ミやすどころ)は心ばせのいとはづかしくよし
ありておはするをいかにおぼしうむじにけん
といとほしうてまうで給へれど斎宮(さいぐう)のまだ
もとの宮(ミや)におハしませバさかきのはゞかりにこと
つけて心やすくも対面し給ハず（源氏）ことわりとは
おぼしながらなぞやかくかたミにそば〳〵し（葵上と御息所）
からでおハせよかしとうちつぶやかれおハしける
二条院(でうのゐん)にはなれおハしてまつりミにいで給ふの
たいにわたりて惟光(これミつ)に車のことおほせ給ふ
女房(ねうばう)いでたつやとの給て姫君（紫上）のいとうつくしげに
つくろひたてゝおはするをうちゑミて見たてまつ
り給ふ（源氏）君はいざ給へもろともにミんよとて御
ぐしのつねよりもきよらにミゆるをかきなでさせて
おひてひさしうそぎ給ざめるをけふはよき
日ならんかしとてこよミのはかせめして時(とき)とはせ
なぞし給ふほどにまづ女房ハいでねとてわらはの
すがたどものをかしげなるを御らんずるにいとらうたげ
なるかミどものすそはなやかにそぎわたして
うきもんのうへのはかまにかゝれるほどけざやかなる
を（源氏　紫ノ上）君の御ぐしはわれそがんとてうたて所(ところ)



さうもあらればおもひやらんとすらんとそぞ
まづひめぎみとおすゞさひとともひさいげさけそ
うしろじくぞあめのとむげるとられるすぢ
のあるや。あまり情（なさけ）なからんとて。そぎさしてうち
いろといふもひきこえしかば。少納言（せうなごん）あはれなる
どけなしとみそてまいる
源　はかりなきちひろのそこのみるぶさのお
ひ行（ゆく）末（すゑ）はわれのみぞみんときこえしすへば

（紫）ちひろともいかでかしらんさだめなくみちひ
る塩（しほ）ののどけからぬにと。（地）ものにかきつけておは
するさま。らう〳〵しき物から。わかうおかしきを
めでたしとおぼして。今日も所もなくたちこみたり。
馬場（むまば）のおとゞのほどにたてわづらひて。上達部（かんだちめ）の
車どもおほくて（源）物さはがしげなるわたりかなと
やすらひ給ふに。よろしき女車（内侍之）のいたうのりこぼれ
たるより。扇（あふぎ）をさし出て人をまねきよせて。こ
ゝにやはたゝせ給はぬ。所（ところ）さりきこえんときこえたり。
（源）いかなるすきものならんとおぼされて。所もげによ
きわたりなれば。ひきよせさせて。（源詞）いかでえたまへる
ところぞとねたさになんとのたまへば（内侍）よしある
扇（あふぎ）のはしをおりて
（内侍）はかなしや人のかざせるあふひゆへ神（かみ）のし
るしのけふを待（まち）ける志めのうちにはとある手を（源）
おぼしいづれば。かの源（げん）ないしのすけなりけり。あさ
ましうふりがたくもいまめくかなとにくさにはしたなう
（源）かざしける心ぞあだにおもほゆる八十氏（やそうぢ）人（びと）に
なべてあふひを（内侍）女はつらしとおもひきこえけり
（内侍）くやしくもかざしけるかな名のみして人だの
めなる草葉（くさば）ばかりをときこゆ。（源地）（紫之）人とあひのりて
すだれをだにあげ給はぬを心やましう思ふ人おほ

かくひとつのはかり事のうちかへりつらしけり。そふはからされてありこと路かうし雅（れ）なさんのうなかぶる人ぐしかはおしゞ。やとゞしいらこと。いどましうめうざしおとそひうれとぶらじくあくおぼさどうやうなひとおもなうしめ宿の人々に。人おひのり給へるなりまれてどちらうかれれいるゝ人々も。心やすくこそとんもあばゆし。かれ息所（みやすどころ）とてもれをおぼしとゞめすくこと。寺法（てらぼう）よりもおほくそひはそうつきかるまとひちてのへど。今はとてうりそなれそぶり給なんいひと心ぼそうりめべくもれ人ときても人々もへまなさんことゝおぼさゞりとて

まちとまかへくおもはしうるまはくこうまなるさ宿まこゑひそうすべうめるもやきそうるずうらすうはまれうきみすれやとおこゑつおぼしひづふけやれ心ちもうきうるやうなおぼされてぶるやあしうち給大将殿（たいしやうどの）まはくそぶり給りんことゝせまてあるれてあるまじきことみすどもさ宿うけ聞（きこ）し給あずくずうめぬらば兄ましくおぼしすそんもことちりみれど。今（いま）は夫（おとこ）いふうひなすさまそもゆるんじとそんやおさうめまはあれんとさそしうつゝひ給へばさめるねまへるれ心もやみすくさむと立いでまへうしみそぶ河原（かはら）のあくうりしせまいとぞうる

げにいとくおぼしいられたり大殿にはものゝけ
めきていたくわづらひ給へバたれもくおぼし
なげくに御ありきもびんなきころなれバ二条院
にもときぐぞわたり給ふさはいへどやむごとなき
かたにはことにおもひきこえ給へる人のめづらしき
ことさへそひ給へる御なやみなれバこゝろぐるしう
おぼしなげきて御ずほうやなにやなど我御かた
にておほくおこなはせ給ふものゝけいきすだまなど
いふもの多く出きてさまぐの名のりする中に
人にさらにうつらずたゞみづからの御身につと
そひたるさまにてことにおどろく
くしきこゆることもなけれど又かた時はなるゝ
をりもなきものひとつありいみじきげんざどもに
もしたがはず執ねきけしきおぼろけの物にあらずと
見えたり大将の君の御かよひ所こゝかしこと
おぼしあてらるゝにこの御やす所二条の君などバかり
こそハおしなべてのさまにハおぼしたらざめれバ
恨のこゝろもふかゝらめとさゝめきて物にとはせ
給へどさしてきこえあつることもなし物のけ
とてもわざとふかき御かたきときこゆるもなし
すぎにける御めのとだつ人もしハおやの御かたに
つけつゝつたはりたるものゝよはめにいでくる

みかど、むねくちうずらぶれおりうゝ、らめばく
ばくと孫そのみなすさめて、おりくいむれをききさ
あげりくいうじうへゞさげまゞふわざをし給
へ、いかなるおとすべきさまならず、ゆめ/\しうしう
おぼしあそびて、院（ゐん）うちもれとうつひ隙（ひま）なく。
れいのりのことまで、おぼしうきをあさ海のうゝど
けるさまにつけても、いとゞおもしげなる人の御身なり。
世中なげなくおもし聞（きこ）ゆかさて給まゝ御息所（みやすどころ）ハ
さぐなずおぼさるらし、此いとうくしまあくさ
ましけれいどこゝろとゞもるありしまろの車（くるま）
あらそひまゝ人の御心のうごくなけるにか、葵（あふひ）の夜ようは
斎宮でもおぼしうごきりうつれ（御息所）ものせひ乃
ミぶれなれこゝち怜例（あとれい）なすゞずのこおぼさるれど。
わかるわかりあて、此終（ミぞ）法（かう）あずどをかせ給、大将どの
きゝあてばかる此（こ）ころちまうと、いとおしうおぼし
そうしてわかりあへりれいなすめのとひ所（じやう）なすれば
いかう世（よ）のび給、心（源氏）うり郭（かく）なするそこりなど、いとこゆう
されぬべく聞（きこ）しけりあて、おすやゝ（御息所）給人（葵うへ）の御有様（ミとりさま）も
うれへ聞（きこ）え給、ゝ（源氏）うかさしもせひいれ給はねど。
おやうちのいとこくしうせひまどくそみくが。
うろゞうしさまうるほどをこすぐさんとてあん
よろげをおぼしのどめうるれこゝろなうゞ、いと

うれしうなんなどくるしひ宵給つねよりもこゝろ
ぐるしげなるをかしこきほどゝりにあられど
こゝそてまつり給ふきさけめあさぼらけに出給れ
さまのをかしきにも（御息所ふみ）なをふりはなれなんとは
おぼしかへさるやむごとなきかたにいとゞ心ざし
そひ給べきこともいできぬればひとかたに
おぼししづまり給なんとかやうにまちきこえつゝ
あらんも心のみつきぬべきこと中〳〵もの思ひの
おどろかさるゝこゝちし給に（源ノ室）文ばかりぞ暮つ
方ある日（文ノ詞）ごろすこし（葵ノ上をさす）よろしかりつる心
ちのにはかにいとくるしげに侍るを

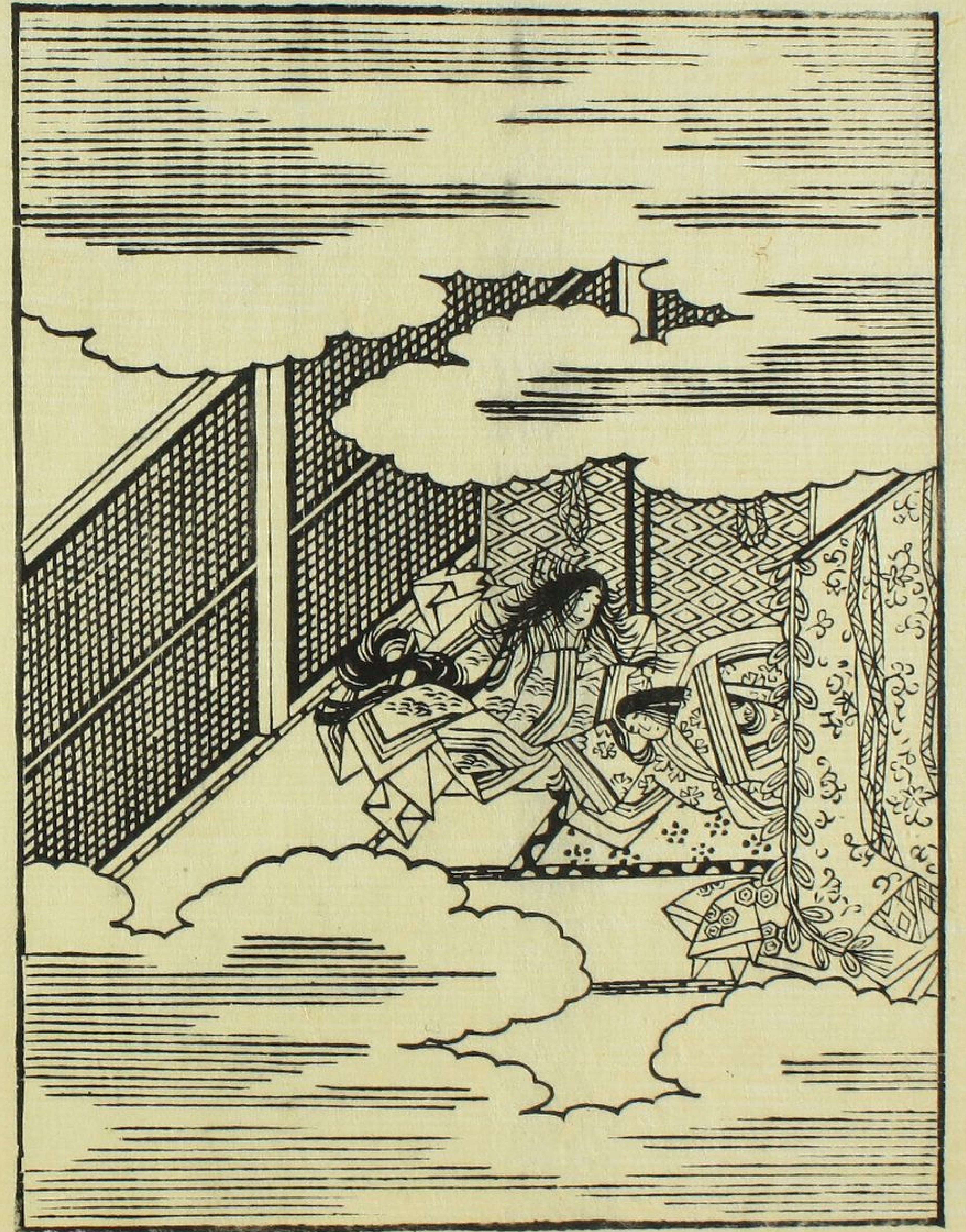
えひきよかでなんとあるをれい（御息所）のことつけと見
給ながら

袖（御息所返そで）ぬるゝこひぢとかつはしりながらおりたつ田
ごのみづからぞうき山の井の水もことはりに
とぞある御手はなをこゝらの人の中にすぐれたりか
しと（源氏）見給つゝいかにぞやもある世かな心を
かたちもとりどりにすつべくもなく又思ひさだ
むべきもなきをくるしうおぼさる御かへりいとく
らうなりにたれど袖（文ノ詞）のみぬるゝやいかにふか
らぬ御ことになん

（源）あさみにや人はおりたつわがかたは身もそぼつ

川までかくさ恋（こひ）ぢを。おぼろけにてや。このはかくり（姜人の大方ならずおぼしけんやうとく）
とこ川らし后（きさき）をぬかずおりお夜にはかのけ
いつくしりてはらじうかでひ給ふ。これはいとさまそ
ぶ夜ぶらおとゞの御息所（御息所父大臣）おぼしけるもありと后（きさき）給は
つきて。おぼしけれどもひとつのうきなずげ
こよりほかに人をおしはれなずぞや心もなかれど。
猶もなほいくばかりたまふしおはさるやあらんと。
おぼしなすこともありぞしこゝろよろけは
ものゝ心もとなくすぐしつれどかうまうぶ
何ぞかなるさまのおりは人のありなからおなき猶
まかでなほさ夜ながら見えぬさきのちびとふし
はかしとおぼしくられねばこゝろさげまり
ぐるりおぼさるゝにや。すかしもうちまぎらは給
夢（ゆめ）にはかれ姫君（姜くるす）とおぼしき人のけはひなる
らはてあるところはいさそでどうくひのさまあさぐう。
うけくまものずなけく。いきさびかつごゝろいで
きそでうちられぐあなずとこし給ことしてびのきあ
つとはなり

（は息木）何かこゝろかうやげに我をさてややはけんと。
うけしごゝろちすしずおぼし絡ありくもあれば
さすらぬことゝもござよ人のれしあまはうちさ夜乃
ことをしもかひ出逢世ぬれば、ましてこれを
いとうくかひなしけべきしうりみゆうとおぼ
すまひとなげうしめうすし世まうるくみすりて
のちまうゝこのくまはまれつれのことなすう、そ
れぶよ人のうへまそてハけとかうゆくしこさば
うけの我身ろがふさうきもまもしさことゝどうひけ
けるすをれうきゝとすべてつれるさひとゝま。
いぞ心もうけ聞しじとおぼしく人をど思ふま



物ぞなり。斎宮（さいぐう）ハこぞうちにいり給ふべかりしを
さはることありて此秋（あき）いり給。九月にハ
やがてのゝ宮（みや）にうつろひ給べければふたゝびのはら
へのいそぎとりかさねてあるべきにたゞあや
しうほけ〳〵しうてつく〴〵とふしな
やみ給を宮人ハいみじきだいじにて御いのりなど
さま〴〵つかうまつれどおどろ〳〵しきさまにハ
あらず。そこはかとなくわづらひて月日をすぐし給
大将殿（たいしやうどの）もつね（秋宮へ）にとふらひきこえ給へど。まさるかた（葵上）
のいたうわづらひ給へバ御こゝろのいとまなげなり。
まださるべきほどにもあらずと皆人もたゆみ給

へるに俄（にはか）（葵）に御けしきありてなやみ給へば。いとゞ
おほんいのりのかずをつくしてせさせ給へれど。
例（れい）のしうねき御ものゝけひとつさらにうごかず。やん
ごとなきげんざども。めづらかなりともてなやむ。
さすがにいみじうてうせられて。心ぐるしげになき
わびてすこしゆるべ給へや。大将にきこゆべきこと
ありとのたまふ。されバよ。あるやうあらんとて。ちかき
き丁のもとにいれたてまつりたり。むげにかぎりの
さまにものし給をきこえおかまほしきこともお
はするにやとて。おとゞ（左大臣）も宮（大宮）もすこしのぞき給
へり。かぢのそうども声しづめて法花経（ほけきやう）をよみ

さりいゝじうらうしらさ（源）琴（こと）のてさびに引（ひき）あげ
てらそてまつりおへ（葵）ども。おしげすてれならは
いらじうらうてまじしをまへる夜そでんま
さらそてまつんよらろらずれめべし。まして。おし
うらるしうおぼえとりなす。すゝろさまれぞよ
衣あはれとくかやうそてれぐしはとあうつち
さらぬ。ひるさゆひてうちそへるもかうでそちら
うしげよな夜めさするうらそひて。おしうなれと
こゆれるを（源）とへておかこじ心うさめたらぬ緒
それとても。これもえらうしおもずるさまへぞ（葵）例（れい）たい
とかづらしくるげうしげなすられまかんをせつと
さゆげよこあげてうちまもり究緒よ涸（かき）の給
あらさ夜をこのふでいろぶ哀（あはれ）のおさらん。あまりい
らくなすさおへは心ぐるしさおやさらのはらを
おぼしよりくこ緒よつるそでらおしうえ緒
まやとおぼして（源）おするごくもいとううかんゑ（かべ）し沢れ
そさりともそしうはおしきでいらなりとらもうれ
らずおふをあなすればらぬいめんはありなすん。おもど文（左大臣大宮ノ事）
なごもうらきちぶりおる中は。絶んぐりてくもしさて
ざなれば。ほひころほどありなんとおぼをとろすぐ
さあなま。（葵付物のけのこと）うそでおらむや。物のうへのいとううしきを。
ちぎしやすめなへとさこんとてるん。うく夜

かうえんともさうしきにめざまれ思ふ人のことは
しおてげにおくりてもれなるんおとまけりと。
みけりしげにかひける
なげきさらびかしはまどつてけばすれ結びも
とあはれさゝぐひのつまどの結ゝおけてひそのへにも
あらずくらかす人にも梵とおやしくなばしめぐらす
まさごみれ息所なりぞりけさまじく人のとく
いかほどかしぬ物どものいひ出ることやさ笑まく
おぼしてのあひけりさめはまずく世はいりみ
ことこそいおりかれとまししなりぬおぼ心
うとおぼされてかくのみへどもれよそてまつしくれ

うしなのみへとのこまへぐぞそれるかれあり
さはまおさましとよれつれなり人々ちかう
まりかもかうしかうゑばさうずうし聞しとも
ありまりあへれば日にはおはずりまやとそ家のれゆ
まそよを旅人家なるがきおこされのて移るくむまれ
まめぐれしとやぼそことりぎりなきさの人なりう
はしまへるはものけどもの何がりまどふけるひ。
いく抱さはぢしうてのちのことまさいと心強るし。
いふぶかりろき縁どもそて寄せのふけりや、さら
なることなりてぬれば山のなすをよくれとやむ
ごとなき僧どもおほかりがたまおきよしのがいて

いそぎまうでぬ。おほくの人の心をけうじける。日比(ごろ)
の名号(みやうがう)すゝしうちやすみて。やまはさりともよおば
すだれ修法(ずほう)などは文こゝろじめそへさせまへどまげば
けうありめづらしきさはりしづきよされ人今ころゆう
べり。宮(みや)をとりじめそてまつりてみくゝまちらんぶちめ
のこりゐるさうぶやしなびどものめげ　くりよいちめし
ことば夜べとまこのくす玉。おとゞ（夕霧こ）〳〵まてさへお
こすゑぞ。それほどそれさわりあまぎるゝおもめで
うしろ。家にてござろうかくれありさ殿を守(き)りて
もくぶおとすゞうねそいゝとおやうくこさえしと。
さつゝゐるまゝとうちおばしそり。あやしう
これはもあはれ心ちとおぼしつゞくるはれで
などもそゞろし（ごまけとそく）のよしきくもうおやしさ
これゆすゞまいられぞこゝろ人などしのそてうちろを
あへぞぞすをおむすじやうよのこあれば殊勝なるぞう
ぶるうとまうしうおばさうてはまいて人のいひ思(おも)
あむしとなど人よの縁べくさてとなすねば心ひとり
まおぼしなげくまぶとれこゝろづくもものまさり
（さ）けざやか夜はやちすゝし　のどめあそておさまりうり
しほどのとくずゞろもこゝろうくおぼしやされ
けふと行人はけうはやんずしくまゝけぢうくて
ころそまうてんはほぶるぞやうして　おほゆべくはば。

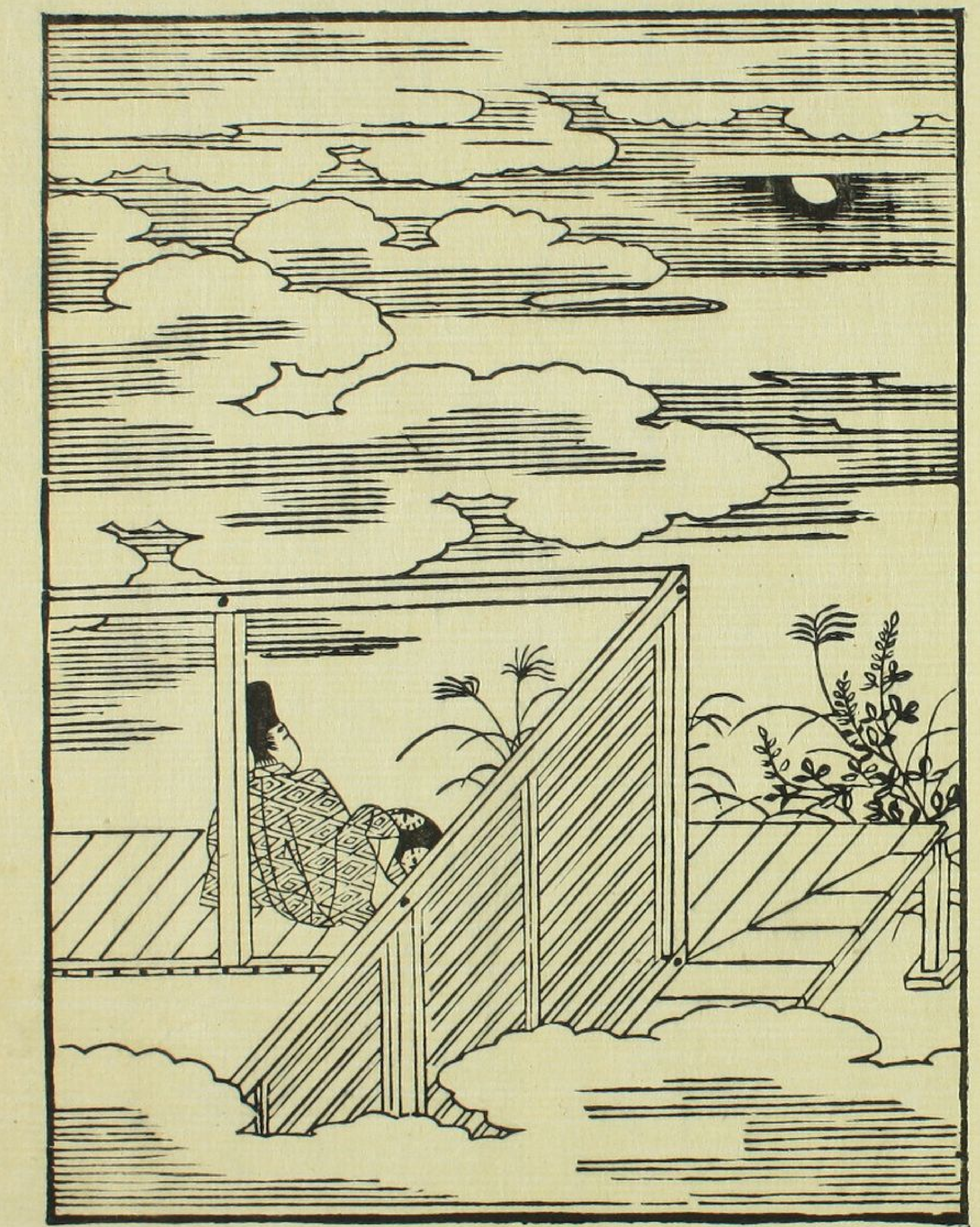
人の御ためいとおしうよろづにおぼして御文
ばかりぞありける。いたうわづらひ給し人の御なごり
ゆゝしうこゝろゆるびなげにたれもおぼしたる
ればことはりにて御ありきもなし。猶いとなや
ましげにのみし給へばれいのさまにてもまだ
たいめんし給はず。若君のいとゆゝしきまで見え
給ふありさまをいまからいとさまことにもてかし
づききこえ給さまおろかならずことあひたるこゝち
して大臣もうれしういみじとおもひきこえ給
へるにたゞこの御心ちおこたりはて給はぬを心もと
なくおぼせどさばかりいみじかりし名残にこそ
はとおぼしていかでかはさのみは心まどはし
給はん。若君の御まみのうつくしさなどの春宮に
いみじうにたてまつり給へるを見たてまつり給ても。
まづ恋しうおもひ出られ給をえ念じがたくて
まいりなんとてうちなどにもあまりひさしく
まいり侍らねばいぶせさにけふなんうひだちし
侍るをすこしけぢかきほどにて聞えさせばや。あまり
おぼつかなき御心のへだてぞあるべき事にもあらない
ふせる所へまくらちかういひいるゝほどにそれごとそ
どあへさりくしとぞおぼしのべる事よおぼしたちゝう
まいりたればいりて物など聞えかはし給へど時々見え

みなたちはいとはげなうざれど（源ん）もむげにまうすまじきへと
さひなしつれあらき所を、おぼし出つれども、夢（ゆか）
のうちしてゆくしらし程のこともなきど宮（きさ）
給つゞてゐもみれむげるさきもとしるやうなり
おもしきしがひなへしうつくしとの給しこゝぐ
もおぼしいづる心うるれば（源氏）ぶざやこそてもせあす
こゝともおぼれどもまさりさくゆげるおぼしなめ
れば、そそて中将まゐれなどさへまゐりひなさてし
みとはなしひ給けんとへ我（あれ）からこそも。（葵）いと
おもしけるへのいとまりうこちされて（あら）むかう
なきされ景色（げしき）まそうしのへるさ所はとらうすげ

まうしげなりけぐしのこぶれらすぢむなく
らくとうわの枕（まくら）のほどりでこさもで給
れば（源ん）しに御事（ぢなまで）とある思ひとありておもひつらん
とおやすきまでうちなきれ給、院（中将）ゝまゐる（まい）
ていとらくまゐでなんがやうまでおぼつかなうず。
らそまつしべられしかへだ殿（大宮）宮のほとおりさ
あるべき心なくやとつてもぐつるもなし給
対（たいの）やうく心づくおぼしなして、例（れい）のおまし所
にておかりわくまでなしまへがみへなくて
まれし給でなどこゝてとなすていとなつげる
うちさうぞきて（葵）出る所つれなりいめとぐめてこい

よしてかしまへり秋（比）のつきめしおるべききこめ
まそ大殿もまいりのまへば君だちもさぶらひのぞき
給事どもありて殿のれおもりしなれのかるは
られひさつでこむよ思ふとのうちへずくなまじめ
やかるなる待よ織（菱）よ御（れい）のれもれをときさあげてやと
いさうまどひ給ずちるれきうくこきくし給ほど
もるくさしいりまぬおしとそこしてそれもく（八月十四日夜之）
ますぞ給ぬればらまくの夜あすりなれどうくまり
なきされさいりなれぱられしやずれるやうなる。
のつきりさくぐわど夜半（よなか）ぢうりなれば山のざす
みするくれの僧（そう）ちもえきうじあへ給はず。いまは
さりともせひゆこうつるよ。おさまりしなれば
とのうちの人まれまでおろかまどふ京（きやう）ぐのれ
らふこひのつひなど立ここれはえ見（きこ）しほどそ
ゆきうこちそいらしされ心まどひどもいとおそろ
しきまでこ給れものゝけのさびくさうといれ
そまいらしとおぼしてれ枕（まくら）なともされげし二三
日ここでまつりのまへどやうくかかり給こしておれ
あれはかぎりとおぼしまつほどされもくいやと
いらじ大将殿ハなのしこしおなそへて世中とい
とうきされるおぼしきみぬれだらぶなめれ
あるりのとふしひどもしらうしとのことでるべ

おぼさるゝ。院(ゐん)におぼしなげき、とぶらひ聞(きこ)えさせ給
ふさま、かへりておもだゝしげなるを、うれしきせも
まじりて、おとゞは涙(なみだ)のいとまなし。人の申すにした
がひて、いかめしきことゞもを、いきやかへり給ふと
さまざまにのこることなく、かつそこなはれ給ふことゞもの
あるをみる〳〵も、つきせずおぼしまどへど、かひなく
て日比(ごろ)になれば、いかゞはせんとて、鳥邊野(とりべの)にゐてた
てまつる程、いみじげなること多かり。こなたかな
たの御おくりの人ども、寺々(てら〴〵)の念佛(ねんぶつ)の僧(そう)
などそこらひろき野(の)に所(ところ)もなし。院(ゐん)をばさら
にも申さず、后(きさい)の宮(みや)、東宮(とうぐう)などの御つかひ、さらぬ
所(ところ)〴〵のもまゐりちがひて、あかずいみじき御とぶ
らひを聞(きこ)え給ふ。おとゞはえたちあがり給はず。かゝる
よはひの末(すゑ)に、わかくさかりの子におくれたて
まつりて、もこよふことゝなき給ふを、こゝらの
人かなしう見たてまつる。夜(よ)もすがらいみじう
のゝしりつるぎしきなれど、いともはかなき御
かばねばかりを御なごりにて、暁(あかつき)ふかくかへり給ふ。つねの
ことなれど、人ひとりかあまたしもみ給はぬことなれ
ばにや、たぐひなくおぼしこがれたり。八月廿日余日の
有明(ありあけ)なれば、空(そら)の気色(けしき)も哀(あはれ)すくなからぬに、おとゞ
のやみにくれまどひ給へるさまをみ給ふもこと



くらゐやじされど宮のこずゑめぐれねて
のぼりぬるかなかうはるれとわかれどもあすべ
てらすおのあらはれあすかれ

ハルとのはおぼしつきても。露まどろまれ給はず。
うしろのはありさまをおぼし出けんおどろきて
つねよりもあはれげにこゝれとし給てんとのどか
よせひておほざりのせさひよつけてもつらしと
おぼされそてまうけんせむ人てうとくげり
しきまゐらせひてさらて給めうるどくやさしき
よるはくおぼしつゞけゝれどひるよばめり
はぞそてまゐられさも夢のこゝちそかれささぶ
まじうぞ。かくそめ給へしとおぼしさへ
ハルかぎりあればす墨衣めさるれど涙で袖を
あらそふけれど。そてねんごろへるさま。いとゞな

まめしき御さまそ経典びやうまよのゝ給ひて。法華
三昧菩提大士とうちの給へるぞさるまじひられさる
ほうしうらへけるゝ若菜とこそてまうり給まも。
外よの志のぶのとぞて寝られどうらうらそ
さんみまうらまうしくだとおぼしろぞさむ。文へ
あげそいりてそのまくまおそさおづり給つぼでおや
うぞまこしかの文おぼしさへぞそれいのうるど
さらせ給ぞらうすゞゆけばれわざのうそざか
どさらせ給も。おぼしけざりしとそれぶつさを
ぞいうじうかんなれめまうるほうるをぞゝ。人の
おやへいでちかめうぞまして。こゝろちかうまる

さぞひおもはせぬざまさりくしくおぼしつ
ゝ袖のうへの露のかゝりけんともあさま
しげなりけるのことは二条の院さまをもおもしろ
御まもりなりたまはずおもはれば心なくせひかける
てぞひらひともすめまたすひつてあしくらし給。
又ごまほれめとぞららぞてまうら給。又此御息所は
斎宮の左衛門のつぎまいり給はされどいふとく
いりくしきれこさまゝりゝよくつけてさそしも
まよひ給ひぞずしともひしきあしらうもおすべ
ていとらしくあうのそかうはぐしずまえていざ
らまにしるがねがはあてき御ままをうちまうしやおぼ

そまはまげらいの姫君のさうぐしくそてもれし
給らんありさ御でおとおぼしやうすゞるは二丁
のうちまひとらうつしのまゝどのおのへぐらちう
めぐりてさうくへどうてはけしきびしくてどき
しもあれとわざあがりちゞするまゝ急ずれける
かぎりえてひさうてきゝ給。念佛の曉のでるでまあび
ぐてしふうさ秋のあはれまさり行風の音な
もとけるころどおすくろめれひとうのまやうしる
まあへう。朝ぼらけのきうかつれわうまざくのそらき
どあうえぐまうつさおぼすびのうとゑすらかゝら
けてざしずまそいりまそらうまめりしらうもとて

ミのへバこやはぞ武家のはなちり字しめ稽くおば

しきうんや

人の世をおそれとこゝくも家けさまたく

家袖をせひしてやまぬで今の世までもひの人ほま

まてあんとあらつれまうもいつまりいのへるうまく。

けもがくる変かくし続抱くうれなのれとかへし

やと心うしきうとそえこしとよるひ字かしざう

むもいとあしく人のれなのうちめべきしと覚し

こゞらなうし人ハとそまうくてもすゞべきまうそハ

おし続けめすめくさうしとさびくとけざや

うまここえけんとぐやしきひがれ心あずかる侍

えおぼしめすまでまかりこゝろあかりし武家のはれ

きよめうるもかづらしやなどひきしうせひ

かづらひのへどかざとあられくりあくもなすけ

なくやとそすらしきれのほめかゝるとよろう

ほどへ侍るけり候せひのへとそうずなずうけりくま

あさき稽はきゝるおぼしめうんやとてみすぬ

どもの男も消しまゐらず家の世は心きゝう

ん稽でもうるきかりはおぼしけらそようしけん

をずもやとそされまもとこえしかへり望まおぼすう

稽なうされば遊びてこゝろのあうしのへる宮変を。

心のあまくあらくこゝろてされぞとおばせもいと

いうじやなるをいとゞくるしがりなげきさまのうさななりけるも。
かやうなる冥(きこ)ありて院(ゐん)よりはおぼさん古先坊(こせんばう)の
おんすゝめされちうくうとりふなりけるもいうじやうひ
かくしてことしさをすてゝ天下安寧(さいあん)の中とせもなん
ぞろはさらにつけさせあひしかばそれはかりかは
もやがてこゝそまゐりあはせんなどつねは
のぼりまゐてやがてうちずゝしおへとさびく冥(きこ)
させ給しそずはいとあはれにこそくねんひそ
なれるしとう心よりはるはりくしさまれ
せひそしてつねはうるさをさへあずしなりべき
ことくおぼしまゐるゝは花(きを)御(れい)のさ海はおもさず。

さるは大かたの世につけて心よりしおかたよりて
はりて昔(むかし)よりなくまれしおへどのこゝやの
かうけりひの程にもおうしういはゆるえとこと
おほくえるして愛(え)よ人どものこのおしこさなど
もおさゆよの家わけおりくをされしろのやくる
なんするなど守(まき)りてもだねのことはこともりぞう
しかへもはくまでつさゝまへる抛をもし世中
まおさそゝきぞうのひさずべきうじくちくもあるべき
うするさまするおぼされそり御法(おうど)變など色(なぎ)めれ
（やうまち十九日）ど正月まで代(など)こよりおりすなしくめれつれく
（この中将の三位とつけしことなり君）を心ぐるしがりて三位中将はつきりまいり給

此世中のれ物語（ものがたり）なども、あやうかるまずる例（れい）乃
こぶらぐくしきことを聞（きこ）路つゞぐなあ聞（きこ）し
ありし内侍（ないし）ぞうちらうひ給くさうひはいちる
めかだ羽のおはおかしとおしやなぞかぐのへ
なりけうろめすひそといまる給もれりうつねは
おりしとおぼしうりかれはらひのさやりなり
し秋（あき）のことなぞざめもさ夜くのすきどくも
とうぶるしいさ夜ちくいふおろうし給そくは
哀（あはれ）なる世をいひてうちなきさるども志すひぐう。
志ぐれうち志そもれあくれなる管（くれ）川の中ねの
あかびあのなるをしきぬるさうすくなる哀がへ（ころは十月の）して。

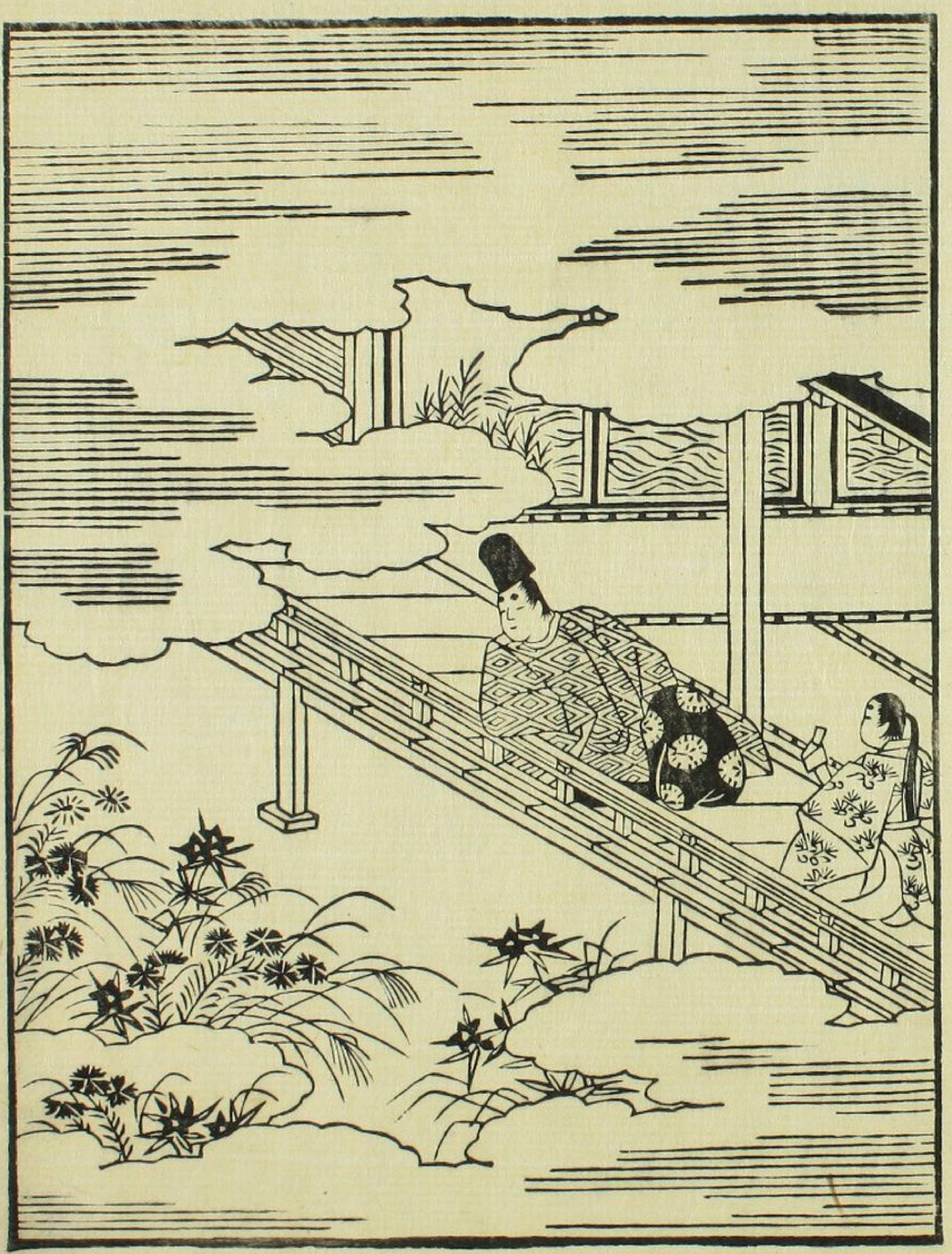
おかしくあざやかなる心をけうしきさ夜志そてまいり
すゞり床（ゆか）にはよしのつまれからうらんまでしりて。
霜がれの前栽（せんざい）をまふ程なりそり風あらくなる
時（しぐ）志ぐれざらしくる程ど、消（きえ）もあへずふゆちそ。
雨（あめ）となり雲（くも）となりけん、今は志つずと打ひとり
ぞらでつれづれつきすへる九さ夜、女（ぢよちう）まですでにかえ枕（まくら）て
なくなくさしまくねぶるぞせまりなんうしと。
色（いろ）めかしき心もなうちまきれつちうう床ね
あくればおしげならず打（うち）こぶれまくへるさ夜なかづゞ。
ひもぶりをさうし女ばし給これ（地）写とくしさ夜
やうなる夜（よる）のれなすそしまぐれるねの川やくか

ふひきかねてやつれ給へるさまにてもおかしぬ
こゝちぞする中将もいとあはれなるまみより
ながめ給へり
（頭中将）雨（あめ）となりしぐるゝ空（そら）のうき雲（くも）をいづれの
かたとわきてながめんゆくゑなしやとひとり
ごとのやうなるを
（源）みし人の雨（あめ）となりにし雲（くも）ゐさへいとゞしぐ
れにかきくらす比（ころ）との給ふ（頭中将心 源と葵との中を思ふ）御気色（けしき）もあさからぬ
程しるくみゆればあやしうとしごろはいとしも
あらぬ御心ざしを院（ゐん）などゐたちての給はせおとゞ
の御もてなしも心ぐるしう大宮の御かたざまなり
もてなさるまでこそすぐさせ給ひしあはれ
ばえしもかりそめてものうげなる御けしきな
がらありへ給ふなりしといとおしうみゆるおり〱
ありつるをまことにやんごとなくおもきかたは
ことにおもひきこえ給けるなめりとみしるにい
よいよくちおしうおぼさるよろづにつけてひかり
うせぬるこゝちしてくむじいたかりけりかれたる
草（くさ）のなかにりんだうなでしこなどの咲（さき）いで
（源）たるををらせ給て中将のたち給ぬる後（のち）に若君（夕霧）の
御めのとの宰相（さいしやう）の君して
（源）草（くさ）がれのまがきにのこるなでしこを

れし秋（あき）のこゝとぞてうすゝほひとなりてやゆらん
ぎらうらんと聞（きこ）えまへりげ比ばにすゝむ心ならされ恋み
がかぞいうじうまいくしきぞ大ま吹（やく）風よつけ
てぶるま末の梢（え）よりけまるつきにほするぞへよし
てとりあへ給はずて

大ま いまさらて申く袖（そで）をくらすられうき海おれ
源 ましやまとるぞしておばいゝぢうつれぐなれば
何さがかのこやまはふの哀（あはれ）いさらともこゝ思ひ給らん
とぞしくうつれ心ざへなすればうしき裕ちれば
ぞうし給うしまと隔されどされものとなりまくる
おれ文（ふみ）なすればどぶるゝてゆらんぞうさずそうの文

あくるひのつきま
源 ゆきそ乱暮（くれ）して袖ハ露けれ袖ぞ秋ハ
あすゝへぬれどぶ明も時雨（しぐれ）くもありれてなどの心
とどめてうき給へるうねうりもさ霧（ぎり）かりてぞぐ
ぐさき程なすうと人でもなくしぐげつらもおばされ
ればおほうら山をさひやりとなくしなすがゝるや
てとて
秋（物おもひ）ぐりのまうらさられぬとなくしうり
しぐれ袖（そで）もいくどとぞふとのこはのつちする
すゝつきまそて源心さひる心まつしたすまぢとまつけ
てもこまうりかくうこ世なまあるはつきひと



しもこそはあはれなれ。おぼし給人の御心ざし殊なり。
これぞすこしぞらんべきもおほくのあはれをそぐし
給ふめ。これにそへてうるさきけも見えたるべき
わざなれば、ゆく人よしすぐれて。人めにつゆ
かゝりなるはおほかりのちゃんもいでこざりけれ

さいの姫君などさしあつまりてそこしとおぼしきつ
れづれにひしとさかんくしとけまうかり
なかれどもこのめあはれさをはてくくんそうちし
てらぬほどうちえうめつくいうでおかへんとおぼ
えぬぞころやすきかざなすりけるゝれそてあれど
おほえあふさらくまつせかすてさうべきうざかれ
人でおまへまて御使なでをきせば中納言の君と
いふ人さし出あびおぼしまうでられせうひの行も
中くきゃうなすぢまもうけ給はず哀なるかれ心に
なとえろそまつるおほくをはなすらしくうち
くらひかそでぐ此日此あやしまりけるゝれもく
あはざるをなすくたかれくてえうしもつねまうく
らずまし遊しくじやうげにことぞすきうものの
まそぶでうち御めひめがらすしそでらへづきさしと
おほかうかれとのかまへがびんぐ君なすくてそてかふ
ごひなきされしとばらでかうきるですつゝちし給れば
さうもれまそおあなさき海よおくづれにそてさせ
給ちん行にひ給ふるしてと聞しもやらず哀とも
いうしあそ御ごうかへいはところあさくすとう
なうし給ふ御心なずさき人ざるあればそて給なん
枕を今こそてらなかれとて火をうちなずめ給へ家
またのうちめれかへるほどぞめでこきぞりけるそ

らうくを給ふ。ちゝはゝはわがつまのおやなれども。
わが心ばせける思へるよりはまさりて。おもてなさば（源氏　わくの君之）。
今（いま）は我をとてもかしづくべき人なれどものすゑはわるく
くろく給ふときおもなめ人よりはくろくそめてくろき
ざらくかざりかろのも段なすざるてころもおかしき
済（すぐ）なすり着（むし綿）をまゐれざらん人はうれしくとものびても
おきるき（夕霧る）人をさらすてぞ知れしめへりし世の名（まうこう）
ちすん人ぐさんれおがいは　ざけまするおもうめへく
ちすんちずこれ心をすゞるべきことども女のすま人は。
いぞや（薬人心）はらべ綺（まち）どとぞ成（ちう）給ひとやおりまいらぶ心
ばそし。古今（たまの）の人ぐまことをくほどくせさき

いふことゞきゝてあそび物ども又ありしよりのれ
かゝることあるべき物なれどわざとやすらぬあはまとう
なしいふかれくしかゝ世給ひ深（深）かくてのちも
いかではつくとも ぐし給ひさんとて院（ゐん）へまい
り給ひし車さし出てござんなれでまいりあはする
ほどおもうしうかなましかれうちさゝこさそ末代も
さることのおもしろきためしはひさしくおきのをは
さうよ人ぐものいゝど心ばせてすゝしひまぼり
つゝ袖ぞもうちはひわらのめでさらゝやがて二条
院まさまりのあべくしてざうひの人々もうしこ
まてもちゐさらんとなるべしぞのくらち出るま。

なかしもとぢむまじきことなれどなほなく
きえがたし。おとゞ（花下）も宮（大）もなのこしさるまじきるゝし
さあらましてあはれなる文の御前にせうそこ聞え
まつり院（河内）にあはれなるかぎりの給ふをすゝみよろしからなか
なんまいり給ふおほしさ後に立出給ふにいかにても。
けふまでなずらへ給ひにけりしくさぶらふこゝろのこ
うごきてなずん宮にさせんも中々に給へられば
さまもまゐり給ふめとあれば思ひもたく宮（六大）にめも
こ給ひぞえ聞えゆりて御目もえ見えでなかりけり。
おとゞ（花下）ぞやゞそいるなへるうちとなへかゞけるにあはれ
しそれ袖もひきとゞむる給はずさてまかりんで

もいとかなしきわかのこと世をおぼしいりぐるしこ
とゝ御心ゝまでおはさ給ふ宮おもはれまとろうちの御
うらいと宮らく宮さ宮めさなくうりおとゞひきしう
さあらひのおひて（六大下河）まうひのいまりまさしもあり
まじきことくにいうそぶるに御ゆるわざに給ふを
あしてひらかうなひらまへまうでられ給ふ心にさえ
のどめ給ふれば。ひとめもいとさぶらひがてしく。心に
ちるゝさ宮に給ふべくなれば院なずでてもえまゐり給
らめなりさとのつゐでに女さんやうにおもむけそう
きせ給へうくだくも給ふまじき御の末に折
られ事がいしくも給ふるとさめてせひさげめて

の給気色(けしき)いとらうたげなりし君(源)もらびくなおかりき
てどれ(紫)きこえさせ給ほどれさめすさへ世のさがや
ゝすへたらうたげしうなりておぼし給心まどひは
さぐひおりまじきわざなれど院(ゐん)にも御歎(おなげき)し
給らんはいとゞしくて世給てんとて給さうらば
時雨(しぐれ)もひまなく給めり紙は夢(ゆめ)ほどみそめぞのし
みそて給ひ(源)きまさりし給ふに末(すゑ)のうちろ僧都(そうづ)の
あるなどのおけらきりすうすずめ女房(にようばう)つかへ人づかり
ぞしうそうさうすまびいろどもゝせらうられ
いとゞうしうばかりそてうちまはれつゝ井あひ
まりうるは(あはれ)いとことかふおぼしすつまじき人

とまりまふらばとりともものゝふそでぬれ立(たち)よりて世給
ちゞやたゞさまあゆかまびとへにせひやすゐかき
女房(ねうばう)たゞなまぐさふと限(かぎり)におぼし捨(すて)つる(かゝ)とおもひ
くむそてみなく命(まれ)あふなるひよりもまうで時ぐ
みれつうふまりける年月のみ御なやみ(なづら)べてばかりけ
きゝ給うめりなんとゝうりみすさうちとけおりしまで
とくひはかぎりつれどもうりせんもつゐまでとおいな
よのさま給りつるはげることそ心ぼそさゆかへり
給れとてゐ文かきまめいと(源詞)あさてる人ぞのるげ
みまにも給ひすみれまさるいかなるをと(を)のどる
ちひめへけるほどはものげかゝれめぐりくあるまでも

給つるを中〻今はなまなかなるをこれにてかへる
まゐらん。今御らんじてんとていで給ふ。おとゞ
見おくり聞（きこ）給て入給へるに（左大臣）御しつらひよりはじめ
ありしにかはることもなけれど空蝉（うつせみ）のむなしき
心ちぞし給ふ。御帳のまへにすゞりなどうち
ちらして（源ノ）手ならひすて給へるをとりてめを
しほりつゝ見給ふをわかき人〻はかなしき中にも
ほゝゑむもあるべし。哀（あはれ）なるふるごとゞもからのも
やまとのもかきけがしつゝさうにもまなにも
さまぐめづらしきさまにかきまぜ給へりかし
この御手やと空（そら）をあふぎてながめ給（地）よそ人に
見たてまつりなさんがおしきなるべし。ふるき枕（まくら）
ふるきふすまたれとゝもにかとある所に
（源）なきたまぞいとゞかなしきねし床（とこ）のあく
がれがたき心ならひに又霜（しも）の花（はな）しろしとある所に
（源）君なくてちりつもりぬるとこ夏（なつ）のつゆうち
はらひいく夜ねぬらん。ひとひの花なるべし。かれて
まじれり。宮（大宮）に御らんぜさせ給ふ。（大臣詞）いふかひなきこと
をばさるものにてかゝるかなしきたぐひ世になく
やはとおもひなしつゝ契（ちぎり）ながゝらでかく心をまど
はすべくてこそはありけめとかへりてはつらくさき
の世をおもひやりつゝなんさましはべる

そへて夢（む）しまれへがるてくこれぞあねのまこのいまはしくそてまちら給むあんおずいらじくこひすまへるてひとひかけりもこし給りどくぶれがれはおそきしせずはおほずむ○ひくてこひ侍しと秋（あき）夕のひかうしみひてはいぞるずしよべうんとれて思もえ志のびおへうまぞるさあまおまへみすうおられくしさ今るぞ（中宮）いとゞうしくそぎこうちうまさうぞぞうさ年さびのうしきえもうげうきんでは前（まへく）はむれぬつてそのがぞちけられみすうこゝどもうらくらひて（源又ハた大臣とも見えし）どのおぼしのあはすうやうは若君（らうぎみ）をこそてまうりてこそれ

みすぐさむべうめれどおもふまゝくるすきさほどのれうるゝそてそのくありさ殿はまうでくまうらんといふもあれどうるゝはられおしむほどそのかぎておもられみするくぐもおぼうさ（源）院へまうり給へれば（源詞）いとくおもやゝせりうる。きうじまで日をかうけやさうろぐうしげるおぼしめておまへすそかれみすぐまうせあて。とやくやとおぼしあつかひ聞（きこ）えさせ給へる御哀（あはれ）まうらげるし中宮（ちうぐうあつかひす）のれうるはまゐり給へれど。人ぐめげらしがりうそてまゐける。命婦の君こそ（源詞）おもひつきをめこしくぐも侍・侍かうまうりてもいう

まとゐせうそこにてあくがれるうき世はおもひ
るまもちかの人にありけしとめなちかくゑ侍ける。
いとらしこそしおほくおも姫の人こぼれしも。
さびくのはきうそこなるみすぐさめ侍てあんなる
まづもとてざしぬおりぶるあつかひしさそう
そへてげど心ぐるしげなるむすめの人への中でる。
まび女のはきゐぐされえいまさきまへるやつれす
ぐらく宮やるるはよそひかりも若めしさまさ
尼のすり帝突まもひさしうまいらめ覚れけるさ
など聞えまで来かけてぞまかで給ふ二条院にかへる
ぐらひみぐるしそておとこにぞんか給聞えしらぶらう

左られまうのがりてまれもくとさうぞきけさ
うちぐるとこゝろつけても源ぬるそこらむじ
さりつる気色どもぞ哀なるもひおもれ給はさうぞく
なりへてぶしのさいなるかきまぐり哀げ人のはゝ
けしひくまりろくあざやかなるえしてぶらきいわろ人
ワろひべみなりすずろめやすくとくの人へてお少納言が
まそみまし心得みすきいとろくへろまくしとを
の上姫君いとうけくしうひきつろひておかす。
ひさしうりつる月どもいとこゝなるすしてとかるび
おなされとてちいさされ几帳ひきおぞくとてそ
まうらまへばらそげくそむしひのあくるはさ海

あかぬ床なきしはみげのかならくるしめうしらけらさ
みどりごみれ心つくし聞ゆる人の心さ度らず系
なくもなすりめられとゝ給まはさられしちらく
ちりおておばつるすりけるほどのこともなず
こそしおてひゞろの拙侭のどるまこそしもほし
それどいまくしうおほしくべれば思ぶらしそこと
ごろはやさしひてまいりらん今もとぶしるくこ
ふそまちべきればとりしうさんへやおほされんと
ろうしひなこそしおもが油云ハられしとゝくもの
うらなすばおやうくさひ聞もやんどちまさ思のび系
おほりくつくひしまへればまるとづもりしこさや

さらうちら給ふらんとねまふそずくき心あうがれ
かるまけさらのそ中将の君といふまれおしそずく
まいりすさひておほとのごもりぬおしうま夕さら
君の御もとるれ文さそてまいり給哀みなる御返ととえん
すふまもづさをぬこゝくものこなすんいうとつれぐくま
なすめがちなれどおするとるさ御有らぬ給うく御過
收て覚しもされど紫ひめ君の御なずさもあくま
ほしうとくのひろそいとめでたうのこみておほ
まげなかしめ給まるこゝおしめされば心しきこづん
うるさなずねりくこそしころこまへどもみも
ころ給くめけしきなすうつれぐくみまるまでく

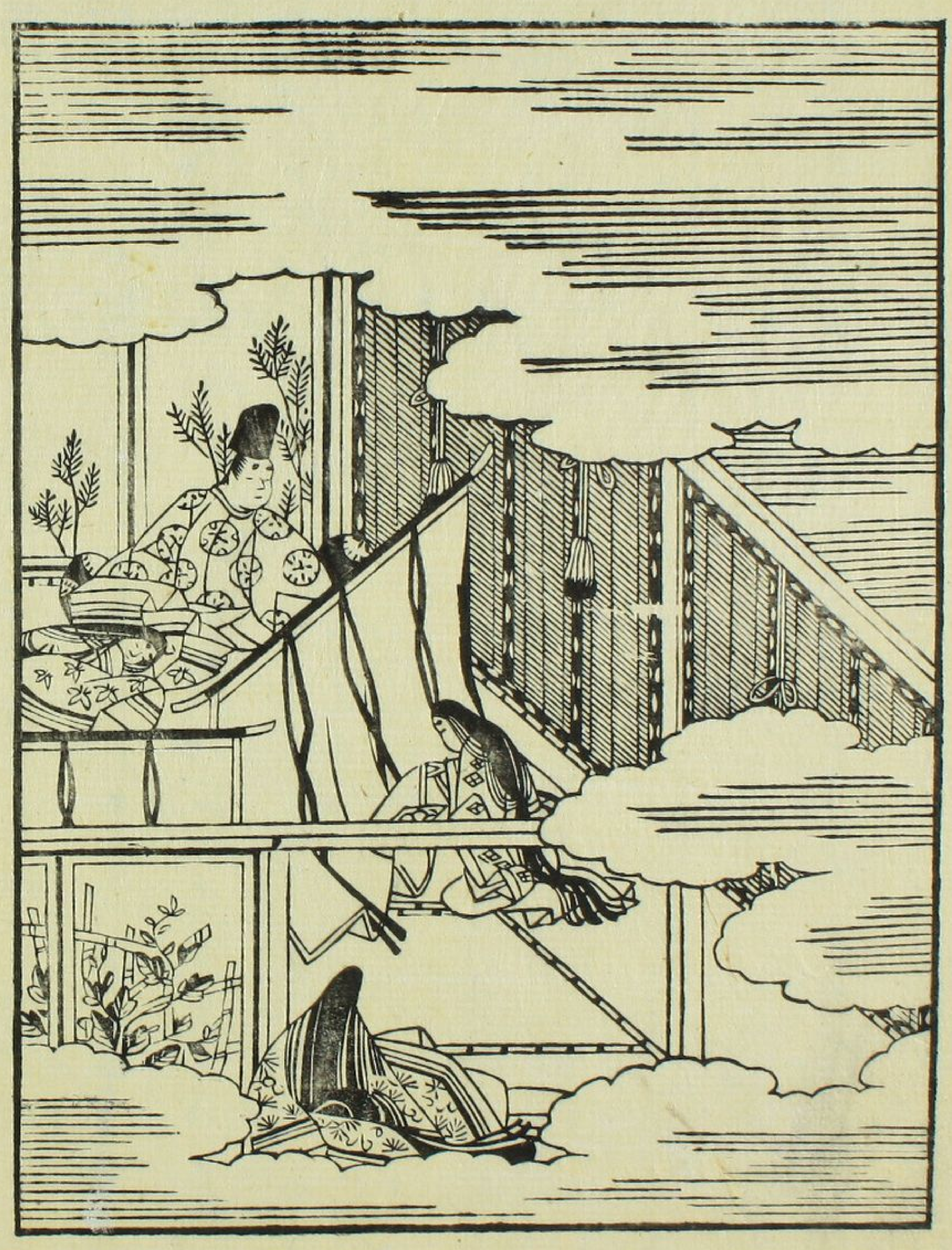
よるは碁うちへんつきなどし給ひて日ぐら
し給ふにこゝろばへのらう〳〵じくあいぎやうつき
はかなきたはぶれごとの中にもうつくしきすぢ
をしいで給へばおぼしはなちたる年月こそ
たゞさるかたのらうたさのみはありつれしのびがたく
なりて心ぐるしけれどいかゞありけん人のけぢめ
見たてまつりわくべき御中にもあらぬに（源）をとこ
君はとくおきさせて（紫）女君はさらにおき給はぬあし
たさぶらふ人々いかなればかくおはしますらん御こゝ
ちのれいならずおぼさるゝにやと見たてまつり
なげくに（源）君はわたり給ふとて御硯の箱を御帳の
うちにさし入れておはしにけり（紫）人まにからうし
てかしらもたげ給へるにひきむすびたる文御枕の
もとにありなに心もなくひきあけて見給へば
（源）あやなくも隔けるかなよをかさねさすがに
なれし中の衣をとかきすさび給へるやうなり
（紫ハ源へすと云て）かゝる御心おはせんとはかけてもおぼしよら
ざりしかばなどてかう心うかりける心をうらな
くたのもしきものにおもひきこえけんとあさましう
おぼさる（源）ひるつかたわたりて悩ましげにし給
らんハいかなる御こゝちぞけふはごもうたでさうざう
しやとてのぞき給へば（紫）いよ〳〵御ぞひきか

かけるそわしまゐりて人々にしめしさとさせ給へバ
よりまておぼつかなくいぶかしかれまてらしぞ思ひの
はるゝるゝかうくくそおりしそれが人もいづるおや
しとおまかへんとそ此かたきまど引（ひき）やかさまへれバ
おせまとしひらしてひらきいがこともいてうめ縁給
へり。おかうるそごれハいとゆくしさきやざしまそて。
よろけるうへさてしまへど。まことありいと
つくしと思ひまて露（る）の此いく人もし給ふぞ。
まじくさるなるしさそまつりといとらけ
うしぞどうしまて此すぢらあそてこまへど。まれ
もたされバ。ワの此心あり夜やとらうしくそて
まつりまで日ひとひいりおそるくさあ聞（きこ）えまへど。
とけがるさ此気色（けしき）いとぐらうしげなり。それよさり
ゐのこのもちゐまいるをうりがるおまひの所で
それバよくしさきさ夜ハおそでゞるゞげうる
おりしげなるひまりごとすぐらりと多（ゝ）くまそてまい
れるをきまて忍られこの夜（よる）出まて惟光（これみつ）とめて。
これもちねうけざくまところときさ夜まほ
あしぞおそのくれまつりせまかよしいまく
ましき日ひろりとうちゆるしそての事ふ此気色（けしき）
と心とらさ抱まておとも思ひよりめ惟光（これみつ）ましりるも
うけ給うそげるあつきゆうみちどめまる曰えり

してきこしめすべきことゝまことにさてもねのこハいらけうつゝまうつしとべうゆんとおあざちてや（源氏詞）きび。こけ（三ケの大事）かひらけうてもおんうしとのすみり。（惟光）心してきちあ。（源）おれなすれの方やとおもハおぼさ。（惟光）人ハもいそぞ。まづつとりふかりきとまでぞけそりぬかりけり。（源氏と）君ハうしく（まび）绝まそでぼまりじめてめなきまそてききん人のうちするもぼとおうしくそ。親じめれとさひ（きこ）聞つゝハかうしすまもおゝざりかり人の心そうてある物ハあれ。今ハひと夜もへぞそんとのけりなるべきことくおばさうのまゝひしまちぬ。（あそ）遊びていさう夜かうして

まてまちわびぬ。（惟光へ）少納言ハおとなしくてそもげりしうやおぼさんとおもひやりてかく心ざしさて（少納言の女に）むすめの（で）弁といふをよび出そ（惟光詞）これ志のびてまつらせよ。その人とぞ。うりごえたらばひとけさしいれさうするわれまらうどなるまうつゝすべきさいそひのもれなちべる。おゆうしてあなたなぞすゞいへバ（弁心）おやしと思へど。（弁詞）おぶみなりといハまうぶちうそめもれさとぞいどれ（惟光詞）いざまとるいまは。さるもじいまそめへよめ色まじ里紗どいふけうさ人（弁）へまいて（けしき）氣色もえかくおもひよらねバまて（まく）枕りて（まくら）枕ごとの帆（もゝ）桃よりさしいれうき（源）君ぞれいのことしあらせ給らんうし

人はえらめはうとめてひちらはまうでさせ給
へるまでぞもてしさうざうの人ぐせひあはする（僚業之嫁ー妹ナリ）
るどもありけれさらどもなずぐに川のまようし
ぞけん前（け）そくいとこさうましてもちね忠
蔵もことさらびびとおうしうとの人らうお細
云はゆとくらしもやくぐこそおほひるこて
させつれおもれなうしげるくおぼしいてぬ
よとなすされ心だちへをまげうちるすれめさてもう
ちうちなの給をもようし世中の人もいるおちひ
つんとさめきあへりうく（源）てのちなうちよも（内裏）院（兄）
まもおうこさ蔵なまうめへる程ずるまぢげ心なすく



おもげなることしかれバおやしの心やと見れたまら
おぼさるゝにひめし東（とうぐう）くうハうめしけるなど
ろうじるゝしめひなどもれバいと（源ん）おしとおぼ
さてもあれどかゝる事ゝぞの心ぐるしくて秋をや
御（ご）でんとおぼしわづらひつれバいと物うくそが
やまうげなのゝまでなしぬて世中のいとうくおぼ
ゆらほどもぐしてなん人ミもこ（そこ）しなるべきとのミ
いへなりこもぐし給（弘徽殿女御之）いまこうじ紀へとくしげ（朧月夜尚侍之）どの
なほこのおほねのミ心つけあへるさ（太政大臣）げなるくさうさし
やんごとなかりつるも（葵うへ）うせあひぬ家なきさて
もおらんなむどかくちおしくらんなむとおほくの

給ハ（惣領公）いとまくしと思ひなれしあて宮ばら人も
おさくなくなるゝあつしら海へつべなどかあし
りんとまいりせ（六門へ）さそまらんよう須まほしく
げむ（源心）君もすしなすべてのさ海ほおぼしざりしを
ゝらおしとおぼせども今ハことさら海ほかくる
心まゝくてなまなくなりよろづめて世なり
かくて思ひさぶまりなん人のうへゝもおもむ
かゝりとぐおやうくおもほしつりなる
彼（あかし）旦（とうさ）那ハいとくおしかれど海ことのやうへと
ろれるさらんせばゞるしずこゝろられぬべしさ
しびろのやうなでミすぢし給ちがきさんべきおふゆ

あはれをしるしする人まではいかんなどさまざまに
ことの外にはおぼしける。すゞろの姫君（紫）をいまゝで
世人もあはれ人ともおもひきこえしめでものしけるさやう
なりし文にちせきこえてんと思ひなりて。
れもぞれし人のあはれくいの給ちをちどなすべて
なをあさ顔は思しまよひけれはあいなどいとあり
げるされど女君（紫）いとゞあやうきこゝろちして
ばかなげなるをきこえてまゐりしきこえしけり
まておもしろき心なかりけれどもやあさうのをおぼし
てぞやまもえゆかしきを給へりさてきこえなれ
給もあはしうけりなかさあはれをおぼしめさぼく

れておはしますもあらずなりはべるはありさ海を。
おかしうもいとおかしうもおぼされて、すぎしころ思ひ
きこえしほどくだされはまたあるめ御気色のこゝろ
うちきこえとゞまうしきこえ給ほどなどしも。うち怨
ばいさちの日は例の院にまゐり給てぞうち苦笑
ゆゞまもまいり給ふされうり大宮にまかでなべり。
おとゞおとうしき年ともいはずむかしの御事
生見しいぞなでさうしくしくかすしもおぼされまし
いとうちきえほりきまへるほけれて。もんどうへ
しるへどもくくおぼしうりぶらしのくらく
ふけすや。あはれくしきけるへのあそおりし

よりけるをつくにに給ふらち出てはるまにいり給
へれば人ぐもめづらしうきはりてしのびあへるぞ
匂宮にこゝはりあへむごろすくおゝすゝみてはわしひ
がらはおそろすりもおそれなりまきらちつきさだ
苦界のはおなじさ海なすれば人まそこそまつり
とりけれども給はしそびなどもつきずぞんそう
けのはさうぞくなどれいのやうなしつけられさ
ある女のかなしぞあはしてなんべてさうぐしく
ちえなすれ家のはせうそこしてかふはかしく忠
まへ忠のかつどうくつこせゆへるりなすん中く
なぞ咲しなひてむりしなるに給なけつはよそて

ひもなごろいげとぶ洞なこうかるがりてげろあひ
なすくゆらんぞられ給なんと忠のつれどかふがり
もなはやつれさせまへとてげうじく忠りて
あつるもれどもまなうられてそてまつれなすな
るすずるふきてまりるべくことあはしけりれたる
がされは家もありざ海もよみつねなすずさうこと
なすはかひなくやいとてさうへあすござうてまし
ばうちおしうあばされましと心ざうしはりり
ほは苦やこあるともまげかゝんぞられんはなすん
まつり給へれどあなひなへいでゝうくともあは
そてえなこしさせ給はず

源 あまたとしけふあらためしいろごろもきて
は涙（なみだ）ぞふるこゝちするえこそ思ひ給へしづめねと聞（きこ）え
給へりけり
大宮 あたらしき年（とし）ともいはずふるものはふり
ぬる人のなみだなりけりおろかなるべきことに
ぞあらぬや